

引喩と暗喩（七）

——源氏物語における白氏文集、「生離別」など

中西進

一 生離別—総角

宇治の大君に思いを寄せる薫は、一夜大君をおとずれて意中を伝えるが、大君の心には強く亡き父の遺誠があつて、決心ができない。薫は大君に添い臥しをしながら、何事もなく秋の一夜が明ける。その折の描写は次のごとくである。

はかなく明け方になりけり。御供の人々起きて声づくり、馬どものいばゆる音も、旅の宿のあるやうなど人の語る思しやられて、をかしく思さる。光見えつる方の障子を押し開けたまひて、空のあはれなるをもろともに見たまふ。 （総角）

とりとめもなく明け方とはなつても、御供の人は出立の合図の咳ばらいをし、馬はいなくな。それを聞くと薫は旅の宿駅の様子など、聞き知っていたものを思い合わせる。光が射してくる方の襖を開け

て、空の趣深い色を、大君といっしょに御覧になる。

さて、そこで、この「馬どものいばゆる音も」というくだりに、『河海抄』は白氏文集の引用を指摘する。「晨鷄再鳴伊テ残月没ス征馬連嘶ッテ行人出ヅ」で、これは次の詩の一節である。

食粟不易食梅難	粟能苦兮梅能酸
未如生別之為難	苦在心兮酸在肝
晨鷄再鳴殘月没	征馬連嘶行人出
回看骨肉哭一声	梅酸粟苦甘如蜜
黄河水白黄雲秋	行人河辺相對愁
天寒野曠何処宿	棠梨葉戰風颼々
生離別	生離別
憂從中来無斷絶	憂極心勞血氣衰
未年三十生白髮	

(文集卷十二、生離別)

例によって中国の巨大な風景と日本のそれは比較にならない。一読の印象はこの詩を源氏になぞらえることを、躊躇させるであろう。しかし、夜明けの出立であり、その出立を征馬しきりに嘶くことによって象徴しようとするあり様は、一つの心意上の約束として理解される。

しかも「総角」ではこの描写を引きついでやや先のところに、むら鳥の立ちさまよふ羽風近く聞こゆ。夜深き朝の鐘の音かすかに響く。

(総角)

という暁の描写があり、さらに、

「あな苦しや。暁の別れや、まだ知らぬことにて、げにまどひぬべきを」と嘆きがちなり。鶏も、いづ方にかあらむ、ほのかに音なふに、京思ひ出でらる。

(同)

と鶏鳴にふれる。

時も同じ秋であり、場所も同じ河辺であって、読者のイメージを乱すことはない。

のみならず、上掲の『河海抄』指摘の個所の直前の、もののみ悲しくて、水の音に流れそふ心地したまふ。(同)

の個所には、大江朝綱の、

辺風吹き断ッ秋ノ心ノ緒 隴水流レ添フ夜ノ涙ノ行

(「和漢朗詠集」王昭君)

の引用が知られている。「流れそふ」というやや特殊な表現であることから、この引用を首肯すべきであろう。

これは王昭君の物語にそう悲別の詩で、すでに大君と薫との別れの心情の上に、王昭君の悲愁が重ねられていたとなると、この生別の悲しみを延長して、当面の「生離別」の詩に文脈を導くことも、大いに推測されるではないか。

王昭君の詩は「辺風」といい「秋ノ心」という。そして「隴水」という水辺のイメージをもち、これらはただちに白詩の「黄河水白黄雲秋 行人河辺相对愁」に流れてゆくであろう。

こしてみると『河海抄』の直感は正しかったというべきだろうか。この指摘は古沢未知男氏⁽¹⁾、丸山キヨ子氏⁽²⁾、古典全集本にも継承されている。

源氏の作者がここに「生離別」を思い起こし、さり気なく文脈にこれを潜めた理由は何だったであろうか。

すでにふれたように「総角」のこの部分も亡き八の宮への思慕、逆にいえば八の宮の死後の影から自由になることができない。深々として宇治全編を蔽う八の宮との死別の悲しみの、その一部をなすのだが、当面の個所でも、

宮ののたまひしさまなど思し出づるに、げに、ながらへば心の外にかくあるまじきことも見るべきわざにこそはと、

(総角)

と云って、朝綱の詩を引用するといった個所へつづく。

死別の悲しみが直接に語られるのにつづく別れが、当該個所である。しかも「ながらへば心の外にかくあるまじきこと」と、生きてあることの苦しみを対比的に述べた上で当面の描写になる。

つまり作者は「死離別」の悲しみにつづけて「生離別」もまた「心の外」のこととして意識されるという人間の業を、心の底にひめていたのであろう。そこから喚起されたものが白詩だったと思われる。

右の文脈を注意してよむと、生きているばかりに薰と一夜をすごし、しかしそれは結ばれない宿命にある——「生離別」の定めにあるという「心の外にかくあるまじきことも見る」と思っており、それを原因として、「見るべきわざにこそはと、もののみ悲しい」と思う。

その上で王昭君が辺風の吹く河辺に「生離別」をしたという故事に及び、「水の音に流れそふ心地」がしたというのである。

隴水の流れは宇治川の流れに転移しているが、その文脈の中で黄河も登場する必然性があったであろう。宇治全編を宇治川の流れがおおっていることも、顕著な特色である。

そう考えると気になる個所がある。「馬どものいばゆる音も、旅の宿のあるやうなど人の語る思しやられて」がそれだ。単純に「馬どものいばゆる音」だけをなぜいわなかったのか。「旅の宿のある

やう」を思い出すといったのはなぜか。

例の夕顔の許で一夜を明かした光源氏は、もの珍しい庶民の生活にふれて、おもしろがる。これもそのコピードといふべきだろうか。こちらは宇治という鄙の住まいだが、それにしても夕顔のくだりでは、庶民の間に埋没している女であることを言う必要がある。一つの落魄のモチーフもあるし、うわなり嫉みもある。物語としては庶民の世俗との交渉という大きな要素がある。

しかし今の場合には、それらの必然性がない。ましてや「旅の宿」といい、そのあり様を人が語るのを思い出すというからには、思い出されるべき「人が語る」ことがなければならぬ。

私は、こうしたところにさり気なく白詩をしのび込ませた、いくばくかの機智を感じる。

さて、こうした機智もあそばながら作者が「生離別」を引用したとすれば、その喩としての効果を、どのように狙ったのであろうか。

この時薰は二十四歳である。ところが白詩によると心労し血氣衰えて「末年三十生白髪」という。まさにこれは薰の心境であろう。

とかく道心の厚い薰である。しかも今の場合は、何事もなかった後の後朝の別れという異常さを描く部分であり、かつ傍目には知られていない内実である。それを秘めて「憂従中来無断絶 憂極心労血氣衰」という情態にある。これを比喩的にいえば「末年三十生白

髪」ということになろう。老をもよび寄せるほどの「生離別」の憂愁を薫の上に投影することが、この引用の狙いだったにちがいない。

二 代書詩一百韻寄微之一藤袴

白楽天と元稹との友情は、もはや喋々するまでもない。詩にもその影は強く現われているが、「代書詩一百韻寄微之」もその一つである（白氏文集卷十三、律詩所収）。

元稹は元和五年（八一〇）江陵府士曹參軍に左降されて、江陵に赴く。白の再三の歎願書も空しかったからである。この、江陵の元稹に向かって白は長詩を贈る。元からの答詩もある。「代書云々」詩はその一つで、同じ時の「和夢遊春詩一百韻并序」（卷十四）とひとしい長詩である。千字に及ぶ長詩の主旨を要約することはむづかしいが、堤留吉氏の要約があるので、掲げておこう。⁽⁴⁾

秘書省校書郎を授けられて以来、心に隔てのない親友となり、詩を闘わし、遊びを共にして来た。君は拾遺から監察御史に進み、さらに東川に使いし、東都に分司したこともあるが、あまりにも剛直厳正な態度が禍いして、ついに江陵土書に貶せられた。しかも妻を喪い、子供を擁しての艱苦、いくら気負って忠勤を励んでも報いられぬ愁嘆、これらを除くには唯仏道によるほかはあるまい。

時に白三十九歳で十分春秋に富み、さらに七歳も若い元とともに、

心中の抱負も大きかったであろう。「秦中吟十首」（卷二）も同年の作らしく、善政への希望も強くもっていた。

そこで不当に左降された元稹への同情と政府への怒りが中心にみちみちて、親友を失う悲嘆とともにこれら長詩を書かせることとなった。

したがって一詩はむしろ遠く別れ住む境涯の悲嘆を切々と訴えるものとなっているが、さて、その詩の一節に次のような部分がある。

……

一点寒燈滅 三声曉角吹

藍衫經雨故 驄馬臥霜羸

念澗誰濡沫 嫌醒自歔醜

耳垂無伯棗 舌在有張儀

負氣衝星劍 傾心向日葵

金言自銷鑠 玉性肯磷緇

仲屈須看蠖 窮通莫問龜

定知身是患 当用道為医

想子今如彼 嗟予独右斯

……

直言のために故なく禍を蒙り、天涯にあい別れる身となったことを嘆くのだが、この「傾心向日葵」——向日葵が一途に太陽を向くという一句が、源氏の中にも見える。⁽⁵⁾

宮の御返りをぞ、いかが思すらむ、ただいささかにて、

心もて光にむかふあふひだに朝おく霜をおのれやは消つ

とほのかなるを、いとめづらしと見たまふに、みづからはあは

れを知りぬべき御気色にかけたまへれば、露ばかりなれど、い

とうれしかりけり。

(藤袴)

歌は玉鬘、宮とは螢兵部卿宮である。折しも玉鬘は多くの男性から求婚を受けている。尚侍としての出仕がきまり、男性たちは焦燥の中にいる。夕霧、柏木、鬚黒大将、左兵衛督そして兵部卿宮。まるで「藤袴」一巻は玉鬘という影として見えながら現し身のとぼしい女性をとり巻く男性群像の絵巻を描く、源氏作者のいささかの遊びの様相をすら見せる巻である。

もちろん玉鬘はめったに心を許さない。ところがその中で一人だけ螢宮にだけ歌を返す。それが右の一首で、心をもって太陽に向かう向日葵は、それなりの意志と自由をもっているのに、わが身における露をはらうことはできないという内容である。露をはらえないとは、螢宮の求婚を拒否できないということである。

これを螢宮は、ほんのわずかなことばだとしても、大層うれしく思う。ちなみに宮の贈歌は、

朝日さすひかりを見ても玉笹の葉分の霜を消たずもあらなむ
というもので、出仕しても私を忘れないでほしいと訴えた一首であった。

この向日葵の習性——太陽を向く習性はあまねく知られたものだし、漢語には「傾葵」という熟語まであって、向日葵のように心を傾けることをいうから、「心もて光にむかふあふひ」とは、必ずしも白詩に限って理解するものではあるまい。

しかし、おもしろいことに、玉鬘の歌を白詩に引合わせることもできる。白詩の当該箇所は気鋭の直言をもって正しい道を志したにもかかわらず、りっぱな意見もすぐにとけてしまい、すぐれた素質もくすんでしまうというもので、傾心の向日葵は必ずしも心をもつて光に向いていることができない。

のみならず、銷鑠し磷緇となってしまうものが金言、玉性であり、いわば降霜のごとき災を蒙り、左降される運命をさけることすらできない。全く無謀なことに、あの長恨歌を句題として和歌をよんだ伊勢集などのように、この歌を「代書云々」の詩の和歌化としても、少しも不都合は生じないのである。元稹の、心をもって天に向う向日葵は、しかし霜害を避けられず江陵に遷された、と。

もちろん玉鬘のいう霜は螢宮の愛情をさす。螢宮が贈歌の中で「葉分の霜」といったのをうけたものだから、元稹が蒙った左降の運命とは、似ても似つかない。まったく別だというべきだろう。

しかし、これを愛情の表象として見てもまた、ふしぎな偶合がある。そもそも玉鬘はこうした螢宮への思いを述べながら、一方で鬚黒の妻になってしまう。それでいて螢宮を忘れ去ってしまうかとい

うと、そうでもない。

一方螢宮はもつとも玉鬘に近かった人物であり、人一倍求婚にも熱心であった。曲折を経ながら二人の交渉は長い。

そうでありながら二人は別々の道を歩むことになり、けっして生活と共にするのではない。こうした関係の二人において、玉鬘が螢宮にだけ当の歌を返す理由もわかるであろう。長い交渉と結果としての別離、その中で忘れられないだろうという意志の伝達は、元白の間にも近いものを認めることになるだろう。

もし当の歌を返し、その成行の中で生涯を共にしたというのが常道だろうが、常道に反するところに螢宮との関係の特別さがあり、その特別な関係が、場合を類似させるのである。

ましてや「光」と玉鬘のいうものが朝廷や天子をさしていると考えれば、それはそのまま白詩の向日葵である。「朝日さすひかり」という螢宮の表現もひとしく、それらの蔭にかくれたところに存在する霜のような愛情をいうとすれば、朝廷の動向にかかわりなく続く元白の愛情も、それとひとしい。

あれこれと符合し合うものを白詩との間にもつ玉鬘の一首は、白詩を思い出さずにはいられない、読者も持ったであろう。長い「傾葵」の語史の中でも、当時の人々にもつとも身近だったものの一つが白詩のこの「傾葵」だったのだから、なおのことそれを拒否しがたかったであろう。

白詩に親しんだ作者も、その例外ではなかったと思われる。白詩を想起しない方がむつかしい。そうしたあり方の中でこの一首が作られたとすれば、やがて仮りに玉鬘が鬚黒の許に赴いたとしても、螢宮との心的距離は元白のごとく保たれるのだという、前ぶれがこの一首だったことになる。

三 開元九詩書卷―橋姫

「橋姫」の末尾は重い。薫が老女の弁から徹くさい反故の入った袋を受取り、開けてみると柏木の遺書が入っている。そこで出生の秘密を知る。激越なクライマックスの一つである。

柏木の書は「つぶつとあやしき鳥の跡のやうに書いて」あり、死を間近にした心身の衰えを訴えているが、さらに女三の宮への一首を書き、

また、端に、「めづらしく聞きはべる二葉ふたばのほども、うしろめたり思うたまふる方はなけれど、

命あらばそれとも見まし人しれぬ岩根にとめし松の生おひすゑ書きさしたるやうにいと乱りがはしうて、「侍従の君に」と上には書きつけたり。

(橋姫)

という。本文の筆跡すら乱れているのに、さらに右の重大な発言は端に書きつけられたものにすぎない。りっぱに生まれたと聞く薫も、将来何の不安もないだろうが、自分も見守りたいと思う。しかし

う命はない。この歌も中途はんばな書きようで乱雑に書いてあり、「侍従の君に」と宛先があつた。

この「人しれぬ岩根にとめし松」ということばが、すべてを語る。薫は自分が柏木と女三の宮との不義の恋に生まれたのだという秘事を、すでに弁の口からは聞いていたが、ここではつきりと確認することとなる。

そんなに重要な文章だが、すでに古い。二十二年前のことだから、

紙魚しみといふ虫の住み処になりて、古めきたる黴くささながら、

跡は消えず、ただ今書きたらんにも違はぬ言の葉どもの、こま

ごまとさだかなるを見たまふに、げに落ち散りたらましょと、

うしろめたういとほしき事どもなり。

(同)

ということになる。紙魚がつき黴が生えている。

しかし筆跡は紛れもなく目にとび込んでくる。たった今書いたように思われるというのも、事柄の鮮烈さであろう。こまごまとした事まではつきりと書いてある。だからこれが世に漏れたらどうなるだろうと思われるほどに衝撃的であつた。そのことが薫を不安にもさせるが、一方父や母をいとおしくさせるのも、人情であろう。

さて、この「橋姫」の段に対して、白詩の指摘がある。

開元九詩書卷

紅箋白紙両三束 半是君詩半是書

経年不展縁身病 今日開看生蠹魚 (文集卷十四、律詩)

この結句がそれである。元稹の書卷を開いてみたら蠹魚しみがいたというのであり、その理由を白楽天は久しく病氣だったからだという。先にあげた源氏では「紙魚といふ虫の住み処になりて」とあり、内容上の一致は誰の目にも明らかである。

もっとも書籍、文反故が古くなつて紙魚を生じることがごく当り前のことであり、何も白詩に限るわけではない。単に古い書物だというのなら、白詩との関係はないと見るべきだろう。

しかし、ここはあまりにも情況が似ている。元稹と白楽天との友情はすでに見たごとくで、その間にとどめられた詩書の巻は、源氏の父と子との間に残された反故と、まったく同一の重みをもつて存在しているのであり、長年を距てたことがけつして往事を風化させず、いや一層懐旧の情を強めつつ、文章に対せしめようとしている。

白氏の前に展げられた詩書巻が、紙魚のためにポロポロになっているとしたら、それはもう白氏の心の破綻のように思える。友を想い既往を顧み、今や落魄の思いが強い。心は過去に向けられ、さまざまな交友の景が生起していたであろう。

それに比べると薫には父の思ひ出はない。生まれるとすぐに父を失つた薫は、父の顔を知らないが、それなりに暗い疑惑とともに過ごした二十年間である。すでに七年前に、薫は出生への疑念を抱いている。以後はなおのこと、父なる者の面影を求めたであろう。

二つながら、こんな過去を封じこめた文書であり、過去は紙魚とともに古くなっているものであった。

私は、源氏の作者が古い反故を開くくだりを書くに当って、柏木と薫との間になぞらえるべき関係を、元白に求めたに違いないと思う。さり気ない記述ながら「紙魚といふ虫の住み処になりて」という一句を挿入することで、読者が元白を想起することを要求したのだと考える。

そのことによって、元白の細やかな愛情の交流は柏木親子のものとなる。もとより柏木のそれは無言である。薫の思慕もまた闇の中を手さぐりするものであった。

四 暮立—蜻蛉

文集卷十四に「暮立」と題する詩がある。

黄昏独立仏堂前 满地槐花満樹蟬

大抵四時心総苦 就中腸断是秋天

この「悲秋」というべき抒情はいかにも日本人の好みにかないところで、事実、多く翻案されて来た。

いつとは時はわかねど秋の夜ぞ物思ふことのかぎりなりけり

よみ人知らず (古今集、卷四、一八九)

いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べはあやしかりけり

よみ人知らず (同、卷十一、五四六)

のごとくである。ただここで「秋天」が「秋の夜」「秋の夕べ」に代っているのは注目すべきで、これまた日本的な好みへの変容であろう。

そうした変容の中で考えれば、源氏物語の次のようなくだりも、この中に包摂することができる。

やうやう明けゆく空のけしき、ことさらに作り出でたらむやうなり。

あかつきの別れはいつも露けきをこは世に知らぬ秋の空かな (賢木)

折しも六条御息所は野の宮にいる。そこを源氏が訪れ、やがて立ち去る。その時の源氏の歌である。これも秋の夜明けの風景で先とひとしいが、その中で、いつも涙に濡れがちだが、この秋の空はいまだ経験したこともないほど悲しいと、秋をとり立てる。その点で『古今集』とひとしい発想である。事実、ここに白詩の引用を認める説があるのは、⁽⁷⁾『古今集』を間においてみると、よく理解できるであろう。

「賢木」は、この歌の次に、

出でがてに、御手をとらへてやすらひたまへる、いみじうなつかし。風いと冷やかに吹きて、松虫の鳴きからしたる声も、をり知り歌なるを……

とつづけ、御息所の

おほかたの秋の別れもかなしきに鳴く音な添へそ野辺の松虫
 という一首をのせる。秋をさらに細分して、いつでも秋の別れが悲
 しい中でも、虫の音を聞くと一層悲しいといったのは、四時に対す
 る秋から、何事もない秋の別れに対する虫の音の別れへと、同じ文
 脈をたどったものと考えるべきであろう。

この虫の音を「満樹蟬」にあててみると、関係は一層深くなる。
 もう一つ、「暮立」を「宿木」の一部に擬することもある。薫が
 中の君の許を訪れ意中を伝えるくんだり、薫は、源氏がなくなった
 後の六条院の荒廃を語る冒頭、

秋の空は、いますこしながめのみまさりはべる。つれづれの紛
 らはしにも、と思ひて、先つころ、宇治にものしてはべりき。
 庭も籬もまことにいとど荒れはててはべりしに、たへがたきこ
 と多くなん。
 (宿木)

と言い出す。この「秋の空は他の季節の空以上に物思いがまし
 す」というところに、白詩の一節が潜んでいるのではないか、とい
 う意見が見られるのである。

この例は右にあげた『古今集』や源氏の「賢木」の段が、より多
 く恋の情緒とかかわっていたのに対して、より広く秋なるものを言
 う点、白詩に近い。

また、秋天が「秋の夜」や「秋の夕べ」に変っていることはす
 でにふれたが、その点についても、こちらは「秋の空」である。「賢

木」の歌は「秋の空」といい、ここに近いようだが、これまた後朝
 の歌の趣で、明けてゆく空を問題とするのだから、純粹な「秋の
 空」ではない。やはり「宿木」のこのくだりは、他とは異質に白詩
 に近いといふべきだろう。

しかし、秋の空は他の時よりすこし物思いをしがちだというのと、
 秋天が断腸の思いを与えるというのでは、やはり逕庭は大きい。一
 般論としての悲秋——古くからのことばでいえば「秋思」と、白詩
 がとくにここで断腸の秋天というのとは、別でなければ白詩の存在
 意義がない。

むしろ以上の源氏の例は、日本的な悲秋の情が白詩と矛盾しない
 のだと考えるべきであろうか。矛盾しないから白詩は納得され、伝
 統と相乗効果をもつてもどもに、次々と作品の文脈に入り込むこ
 とになるだろう。

ところが、もう一つの源氏の場合は、以上と異質である。

東の高欄におしかかりて、夕影になるままに、花のひもとく
 御前の草むらを見わたしたまふ。もののみあはれなるに、「中
 に就いて腸断ゆるは秋の天」といふことを、いと忍びやかに
 誦じつづみたまへり。
 (蜻蛉)

誦じたのは薫である。誦じることによって作者が、明らかに
 「暮立」を讀者に示すのだから、それなりの意図を考えなければな
 らない。

そもそも「暮立」は下野(滑上)での作で、白楽天は貞元二十年(八〇四)下野に居を下し、翌年ここを離れるものの元和六年(八一)母陳氏の死によって下野で喪に服した。そして三年後の元和九年(八一四)冬に太子左贊善大夫を拜命するまでをここに過ごした。

この下野時代、とくに白楽天を悲しませたのは、母の死に重なる女兒金鑾の死であった。母は五十七歳だったが、女兒は三歳である。この悲痛を如実に示すかのように「念金鑾子二首」(巻十)、「病中哭金鑾子」(巻十四)、「重傷小女子」(巻十四)などを作る。いずれも下野での作である。

金鑾の生前、生後一年の元和五年(八一〇)には「金鑾子碎日」(巻九)を作り、

若無夭折患 則有婚嫁牽

便我帰山計 応遅十五年

とまで将来を想像していたから、文字どおりの「夭折」は、どれほどか悲痛であったろう。

「暮立」をとりまく情況は、かくのごとくであった。第一句「黄昏独立仏堂前」とは、そうした死者への哀悼、母と子の死という、死に浸された心情の中から発せられた句であった。仏堂というのも、その背景を背負ったために、歌い出されたもので、何の建物でもよかつたのではない。

はたして、「蜻蛉」の情景は「暮立」のそれと似通っているであ

ろうか。「蜻蛉」では上掲のごとく「夕影になるままだ」と、夕暮に時間が指定されており、さらに「花のひもとく御前の草むらを見わたしたまふ」というのは、口吟の契機ともなる情景で、これが「満地槐花」を連想させるものをもっていたのであろう。

こうした情景が「東の高欄におしかかりて」いた薫をとりまくのであり、それは楽天が「黄昏独立仏堂前」という中で認めた風景と一致したために、薫が白詩を吟ずる結果となったであろう。

そこで、「暮立」が介入することによって、この物語の筋はどのように影響をうけるであろうか。すでに述べたごとく「暮立」は季節の秋の悲しみにとどまらず、金鑾子の死を前提とした悲秋であったが、それと同じ心情を薫に考えるなら、ここにも「死者」の浮舟がいる。

浮舟はこの年の春、突如失踪する。入水したと誰もが思い、右近は葬式をすませる。薫や匂宮の驚きも大きく、夏には薫も四十九日の供養をいとむ。

そして秋、薫は六条院でしみじみとわが生涯の回想にふけり、宇治の姫君たちとの宿世を考える。薫はいま中の君がもっとも心にかかっているが、もとより宇治の八の宮の一族として「かの一つゆかりをぞ思ひ出でたまひける」(蜻蛉)といううちの一人である。

「死者」としての浮舟が軽いわけではない。のみならず、周知のように「蜻蛉」の裏側には、生きている浮舟の世界が「手習」として

併存しているものであり、この生と死との両面を照らしながら物語は進行する。

ここでそのことをいうのは当を得ていないが、まるで複式能のよ
うなこの構成は、偽死（夜半の寢覺）を信じ転生（浜松中納言物語）
を考えた古代人の生のドラマとして、まことに見事だといわざるを
えない。この構成は深い人生觀の上に試みられたものであろう。

いま口吟が浮舟を思つてのことだとすると、この虚の中に、たし
かに生きてゐる死者を思つてゐることになる。このたしかさは白に
おける金鑾子のたしかさと、ひとしかつたであらう。

「手習」の巻では僧都が浮舟を訪ねるくだりに、白詩の引用がある。
先稿ですでにふれたが、「陵園妾」の一節、

松門到暁月徘徊

の僧都の口吟から始まり、この白詩的世界にかこまれながら浮舟は、

聞蟬聽燕感光陰 眼看菊蕊重陽淚

手把梨花寒食心 把花掩淚無人見

という心境にゐる。

「蜻蛉」の「暮立」は「手習」の「陵園妾」と対立的に引用された
に相違なく、薫の心境と浮舟の心境とは、この二詩の対立的引用の
中に呼応させられてゐるというべきだろう。先稿でも「陵園妾」の
引用が、浮舟の世界を死の世界に見立てるためのものだといったが、
こうした世界に「死」せる浮舟への哀悼の深さを、源氏の作者は金

鑾子への白のそれと比較したかつたのだと思われる。

薫の浮舟への思慕の強さは他にも見られる。この口吟のあとで句
宮がやつて来、すぐに後姿をみとめた女房の名を「これよりあなた
に参りつるは誰そ」と他の女房に聞く。他の女房がすぐに「かの御
方の中將の君」と答える。

これに対して薫はいろいろと考える。このように軽率に名を明か
してよいものか、などと。

それは好色な句宮へのいまいままさに発展し、意趣返しをしたい
と思わせるほどで、

わが思ひしやうに、やすからずとだにも思はせてまつらん。

（蜻蛉）

と考えるまでに到る。つまり浮舟を思慕しながら句宮に奪われてし
まった過去を思い出しているのであり、まさにこの場面にも浮舟が
生きてゐることを証拠立ててゐる。

「暮立」の口吟から好色な句宮の話題へと物語が展開するのは、比
喩的にいえば浮舟を「死」に追いやった経緯を、口吟の後に追認す
る意図にもよるものだと思われる。

こうして「暮立」の引用によって、六条院は「仏堂」にすら変る。
秋のあわれは、実は死者のあわれだったのだし、金鑾子の喪失とも
比べられる浮舟への思慕を讀者に訴えることとなつたのである。

五 贈内—宿木

「暮立」を作った下野で、白楽天は「贈内」という詩も作った。妻に送った詩である。

白楽天は元和二年（八〇七）のころ妻楊氏と結婚し、同じ題の「贈内」（文集巻二）を始めとして「寄内」（巻十四）、「贈内」（同）、「舟夜贈内」（巻十五）、「贈内子」（巻十七）、「二年三月五日齋畢開素当食偶吟贈妻弘農郡君」（巻六十九）ほかを作る。最後のものは武宗の会昌二年（八四二）七十一歳の時の作で、死に四年先立つ。三十五年間にわたるといっても、数の多さは印象的である。

この中の一つ「贈内」は次のごとくである。

漠々闇苔新雨地 微々涼露欲秋天

莫对月明思往事 損君顔色減君年

（巻十四）

初秋の雨の中、一面に地上には苔がひろがり、わずかな露をふくんで天は秋らしくなってきた。こうした時に月を見て昔の事を考えないようにせよ。顔色が悪くなり、ふけ込んでしまうから、という一首である。

この一首は今まで源氏に引用されたとして、あまねく知られてきた。それを否定した研究は管見に入らないが、あったとしても、おそらく僅少であろう。

源氏は次のように引用する。

中将の参りたまへるを聞きたまひて、さすがにかれもいとほしければ、出でたまはんとて、「いま、いとく参り来ん。独り月な見たまひそ。心そらなればいと苦し」と聞こえおきたまひて、なほかたはらいたければ、隠れの方より寝殿へ渡りたまふ。

……

老人どもなど、「今は入らせたまひね。月見るは思みはべるものを。あさましく、はかなき御くだものをだに御覧じ入れねば、いかにならせたまはん。……」（宿木）

いま匂宮は六条院の六の君の婿として迎えられようとしており、一方宇治の中の君との関係も続いている。そこで六条院からの使者として中将の君がやって来たのでそこへ赴こうとし、女君に「すぐ帰ってくるから独りで月を見たりしてはいけない」といいおいて、寝殿の方からそつと外出する。

残された中の君は物思いが絶えず、月がのぼるにつけても思ひは募る。そこで老人が「もう内へお入りなさい。月を見るのは思むことです。ほんのちょっとした食物さえも御覧にならず、どうなってしまうのでしよう」と心配する。

この「独り月な見たまひそ」「月見るは思みはべるものを」が白詩の引用だとされるのである。たとえば古典全集本の頭注では「月を見るのを思む発想は」としてこの白氏文集の「贈内」をあげ、これ「などの中国伝来の思想で、和歌にも多い」という。⁽¹⁰⁾

たしかに、右の頭注にも引かれるように、

ひとり寝のわびしきままに起き居つつ月をあはれと忌みそかね
つる

(小町集、後撰集、六八五)

大方は月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの

在原業平 (古今集、卷十七、八七九)

などがすでにあり、他にも、

ある人の、「月の顔見るは忌むこと」と制しけれども、ともす
れば人またも月を見ては、いみじく泣き給ふ。

……

翁、「月な見給ひそ。これを見給へば、物思す気色はあるぞ」

と言へば、

(竹取物語)

が先立つ例として見える。したがって、これらの中にすでに「贈
内」の引用があり、それを源氏が継承したか、他の多くと同じよう
に文集の一首を源氏が引用したか、ということになる。このあり方
は、右に問題とした悲秋のあり方と、まったく一致していて、興味
ぶかい。

しかし私は右の通説に反対の立場をとってきた。⁽¹⁾ 月を忌むことは
広く世界的に分布した習俗で、わが国の古代にも見られ、何も白詩
を俟たずとも信じられていたからである。そしてまた、習俗に属す
るときものは、たった一編の詩によって決定されるものとは別だ
からである。

さらに、実は、白詩は月を見るなどはいっていない。月を見て往
事を思うなというのであり、そうすると年をとり顔色を損なうとい
うのだから、これは月を不吉なものとして忌むことと異質である。
その点業平の「月がつもると老を迎えることになる」というのが一
番近いにすぎない。総じて白は月に対して否定的で、上述の「舟夜
贈内」でも、

莫凭水窓南北望 月明月闇総愁人

という。

要するに白詩と源氏との一対一の関係を考えることは不可能であ
る。源氏はもっと広い「月を忌む」ことの中にあり、その点は白詩
として同じだったと考えるべきである。

そしてこの同じ情況の中で、もちろん源氏の作者は「贈内」を知
っていたとすべきであろう。

源氏の当該箇所は月をめぐって出色の出来ばえを示している。

まず、この夜の情景は六条院の準備がととのい、匂宮を待つばか
りだのに、

十六日の月やうやうさしあがるまで心もとなければ(宿木)

と、月の出によって時間が過ぎたことが暗示され、ついで、この月
を心理に重ねて夕霧の次のような一首を語る。

大ぞらの月だにやどるわが宿に待つ宵すぎ見えぬ君かな

一方、二条院の匂宮も同じ月を眺めている。六の君の婿となるに

しても中の君が忘れられず、

らうたげなるありさまを見棄てて出づべき心地もせず、いとほしければ、よろづに契り慰めて、もろともに月をながめておはするほどなりけり。

(同)

と。

そこに上述のように使者を迎え、いよいよ腰を上げなければならなくなる。そこで「独り」月を見るなということになった。

しかし匂宮が出かけた後も、月は物語から離れない。すぎこしを女房に嘆く中の君の物思いは尽きないままに、

姨捨山の月澄みのぼりて、夜更かくるままによろづ思ひ乱れたま

ふ。

(同)

とあり、匂宮の心づかいとは裏腹に、月が心を乱す方向へと筋を導いてゆく。そこで老人が上述のように、ふたたび月を見るなということになる。

この叙述は、忌むべき月の力をむしろ積極的に用いたというべきだろう。そして積極的に用いた意図は、中の君の死の予兆にあった。

老人の心配は、

ゆゆしう思ひ出でらるることもはべるを、いとこそわりなく

(同)

というところ、すなわち大君が同じように食欲を失って死んでいったことを思い出す点にある。つまりは月下の死へのおそれである。

後の作品だが『更級日記』の死んだ姉を照らしていた月光が、すぐ思い出されるであろう。『竹取物語』のかぐや姫は昇天という一種の死を、月明の夜に余儀なくされた。当の源氏でいえば、紫の上もほとんど満月の頃に死んでいった。こうした文脈の中での、月の殺害を、作者はほめかすのである。

この、源氏の展開の中には、月を畏怖するという古来の伝統が十分にふまえられている。わざわざ「老人どもなど」が「月見るは忌みはべるものを」といったという表現は、これが古老相伝のことだといいたいのであり、さらには竹取の「翁」を匂わせているのである。

上掲の小町の歌も、竹取の伝統の中に入れるべきものであろう。

詞書には、

月のいとあはれなるを見て、寝むことこそいと口惜しけれど、すのこにながむれば、男、忌むなるものをといひければ、……とあり、一般論として忌むべきことを男が告げている。

ところが小町は、ひとり寝がわびしいので忌みかねるのだということに、ひとり眺める月が登場した。源氏がまず最初に月を見るなどといったのが、けっして一般論としての月の忌ではなく、「独り月な見たまひそ」であったのは、この流れを汲んだものにながいがいい。

とすると「宿木」の二つの月の禁忌は、後者が竹取から小町への

男のせりふへと続く文脈を受けつぎ、前者が小町の歌からの文脈を受けつぐものだという事になる。

それでは源氏は古今の業平の歌と無関係なのだろうか。そうではない証拠は、右にあげた「姨捨山の月澄みのぼりて」が、『古今集』の、

我が心慰めかねつ更級きよのや姨捨山に照る月を見て

(巻十七、八七八)

を踏まえたものと思われる上に、この一首が『古今集』で当の業平の歌の一首前に並ぶことである。換言すれば姨捨山の歌に暗示された老の上で、業平歌がよまれるという古今の趣好を、そのまま利用したのが源氏である。源氏は中の君の物思いを語り、その上に「姨捨山の月」を出して、この物思いの果に中の君が年をとることを暗示し、その上で老人に月を見るなどいわせるのである。

そこで、この構成の中に、白詩も介入する余地があった。くり返すと「損君顔色減君年」というのが白詩だったから、年をとることを月にかけていうのであり、月と老との『古今集』以来の流れに抵触しない。

それでは抵触しないだけで、積極的な引用とは見なしがたいのか。白詩「贈内」は「莫对月明思往事」という。往事を思うことを禁じていて、直接月見を禁ずるものではないことは上述のとおりだが、この限定の中で、さてこそ源氏は、中の君が月明の中で往事を

回想しているのである。

「幼きほどより」と八の宮一家のすぎこしを語り、父宮や姉の死を回想し、

来し方行く先みなかき乱り、心細くいみじきが、わが心ながら
思ひやる方なく心憂くもあるかな。
(宿木)

と思う。その次に姨捨山の月がのぼるといい、老人が月を見るなどという。まさに「莫对月明思往事」こそが隠されているといつてよいだろう。「老人」は「月見るは忌みはべるものを」というかわりに「莫对月明思往事」といった方が、より直接的だったのである。

この往事を思うというモチーフは、竹取にも小町集、古今にもない。白詩独特のものであることを考えると、源氏はここに白詩をひそめたと考えるべきであろう。

そう考えてよければ、例によって源氏は当面の情景を一層深くする。当の中の君の周辺は、

松風の吹き来る音も、荒ましかりし山おろしに思ひくらぶれば、
いとどこかになつかしくめやすき御住まひなれど、今宵はさも
おぼえず、椎かの葉の音なには劣りて思ほゆ。

とあるていどで、詳しい情景を読者が感じとるのは困難だが、白詩によって、

漠々闇苔新雨地 微々涼露欲秋天

という一景を中の君の周辺に思い描くことになる。

また、句宮の月を見るなといい、「心そらなればいと苦し」という気持は、まるで「贈内」のように中の君に向けられていることになる。「心そらなれば」というのは、とりとめもない心境をいうのであろう。白詩が年をとることと並べて顔色を損じるといふのは、心がそらになった果のことである。

「贈内」は、古来の月の禁忌の文脈の中に「思往事」という一点をもって参加し、中の君の周辺の風景を深くし、六の君よりも中の君を妻と考える句宮の愛情を暗示するものと考えられる。愛情は、いま六の君と中の君との対立という、微妙な関係の中で、とくに大事なものであった。

六 盧侍御与崔評事為予於黃鶴樓置宴罷同望——篝火

白楽天には先稿でとり上げた作品「琵琶行」があり、さらにその基となった「夜聞歌者」がある。「夜聞歌者」は元和十年（八一五）四十四歳で江州へ赴く途中、鄂州での作であったが、同じ鄂州、武昌（武漢）での作に、「盧侍御与崔評事為予於黃鶴樓置宴罷同望」

（文集卷十五）なる七言律詩がある。

江辺黃鶴古時樓 芳置華筵待我遊
楚思淼茫雲水冷 商声清脆管絃秋
白花浪濺頭陀寺 紅葉林籠鸚鵡洲
摠是平生未行處 醉來堪賞醒堪愁

白の潯陽到着は十月で、それにわずか先立つころの作であろう。

黃鶴樓の名は聞き知っていたであろうし、そこでの置宴に感謝しつつ、しかし旅における秋思は深い。その冷たく澄んだ秋韻は管絃の響きをともなつて第三、四句にみごとに歌われ、初めて接する頭陀寺や鸚鵡洲が旅愁をそそる情をもって結句をしめくくっている。酔って興ずればこれらは珍しくも美しいところだが、流謫の情に目ざめてみれば、愁に堪えがたいところである。

なかんずくこの詩は、季節そのものの調べが音楽の調べのように歌われるところに特色をもつが、源氏の中にも音楽と季節とが、調べを分かちがたくする一節がある。

「篝火」の巻は玉壺をめぐって光源氏や柏木の心の動きを語る短章だが、特に音楽が多用され、源氏が、

忍びかねつつ、いとしばしば渡りたまひて、おはしまし暮らし、
御琴なども習はしきこえたまふ。

……
御琴を枕にて、もろともに添ひ臥したまへり。

……
東の対の方に、おもしろき笛の音、箏に吹きあはせたり。

（篝火）

などとあり、源氏が西の対に夕霧、柏木、弁少将を誘うと、
うち連れて三人参りたまへり。「風の音秋になりけり、と聞

こえつる笛の音に忍ばれてなむ」とて、御琴ひき出でて、なつかしきほどに弾きたまふ。源中将は、盤渉調にいとおもしろく吹きたり。(同)

という遊びになる。

はたして秋の宴は、この黄鶴樓の詩と関係があるであろうか。「河海抄」は「風の音……」の条にこの詩をあげる(但し、「森」は「渺」⁽¹²⁾)。具体的な事柄における関係は見出しがたい。詩の中には「商声」(宮を主音とする音階の第二音)とあり、源氏には盤渉調(盤渉の音を宮とする律の調子)とあるが、これも意図的なものではあるまい。

むしろすでに指摘されるように、「風の音秋になりけり」と聞いたという笛が「秋風楽」(唐楽で盤渉調)を吹いていたことと、季節の秋の到来とをかね、また著名な『古今集』の藤原敏行の「秋来ぬと」(巻四、一六九)を重ねていたことの方が、「商声清脆管絃秋」という句の気持と、よく通じ合うであろうか。いうまでもなく、五行説で商は秋であり、白詩もその上で歌われている。

また、白詩は盧、崔両友が白のために集まって宴を設けてくれたといい、この三人が「管絃秋」を楽しんでいる。この趣好が「篝火」の四人の合奏と共通する。源氏がまず琴を弾き、夕霧が笛を吹く。弁少将は歌い、柏木はまた琴を弾じた。

しかし、なおこれらとてごく普通のことと考えられるので、引用

を積極的に認めることはむづかしい。

むづかしいが、全体をおおっている楽宴を雰囲気として感じる側に立てば、詩の末句「摠是平生未行処 醉来堪賞醒堪愁」は、鮮烈なひびきをもつてくる。

この気持はこもごもに、源氏の心であり柏木の心でもあり、また玉鬘の心でもある。とくに真剣なのは柏木で、

この中将は、心の限り尽くして、思ふ筋にぞ、かかるついでにも、え忍びはつまじき心地すれど、さまよくもてなして、をさをさ心とけても掻きわたさず。

という心は、たとえ白詩が頭陀寺や鸚鵡洲という具体的な場所をさして「平生未行処」といい、それを醒めて堪えがたく愁うといっているにしても、その心を、十分な比喩とすることができであろう。玉鬘への気持は柏木にとって、まだ経験したことのない感情であり、堪えがたい心なのである。

楽の音に酔っていれば、それなりに賞するに堪えるが、醒めるとそれもかなわなれないという思慕は、源氏にもあり、いつか玉鬘の心にもきざそうとしている。白楽天の江州流謫という荒涼とした心をも重ねて比喩しようとするのなら、この「管絃秋」は切なく哀しい。

七 庾楼眺望—若菜上

「若菜上」は長大な巻だが、長大であるばかりか重要な問題もこの

中で語られる。すなわち女三の宮の降嫁である。

このことがもつとも深刻だったのは紫の上であった。新婚三日の夜、源氏は夢に紫の上を見、おどろいて「夜深きも知らず顔に急ぎ出でたまふ」。そして紫の上の許にもどる。以下は、その立ちもどったところの描写である。

雪は所どころ消え残りたるが、いと白き庭の、ふとけじめ見え
わかれぬほどなるに、「猶残れる雪」と忍びやかに口ずさみた
まひつつ、御格子うち叩きたまふも、久しくかかることなかり
つるならひに、人々も空寝をしつつ、やや待たせてまつりて
ひき上げたり。

(若菜上)

作者はいささか光源氏につらく当っているようで、多少みじめな光源氏が描かれるが、この「猶残れる雪」は白氏文集の詩の口吟である。

独憑朱檻立凌晨 山色初明水色新
竹霧曉籠嶺月 蘋風煖送過江春
子城陰処猶残雪 衙鼓声前未有塵
三百年來庾楼上 曾經多少望鄉人

庾樓曉望(文集卷十六)

この詩は元和十一年(八一六)四十五歳の時の作とされており、前年十月に江州司馬として着任、元和十三年十二月に忠州刺史に転ずるまでの間の作である。

庾樓は晋の庾亮によって揚子江に臨んだ九江県に建てられたもので、庾公樓ともいわれる。江州に来て、珍しく、ここに遊んだものであろう。

当時この詩は有名だったらしく、「竹霧云々」以下の第二、三句は『和漢朗詠集』にもとられている。

ただ、この部分ではなく、次の句を口吟したとするとところに作者の陳腐になずまい気持を見るべきであろう。

たしかに口吟できるほどに、詩は今の情況に通じ合う。源氏は先立って女三の宮を迎えた日として「二月の十余日に」(若菜上)とあり、春の半ばである。詩が「蘋風煖送過江春」というのと、季節を共通させるであろう。

時刻も源氏が「明けぐれの空」というのに対して白詩は「凌晨」「竹霧曉籠」といい、何よりも「曉望」という詩題にも時刻は明記される。「衙鼓声前」というのも早朝を知らせてくれる。「衙鼓」の音は源氏の「鶏の音」ともいうことができる。

そして肝心の残雪も上掲の源氏の中に見えるほか、「雪の光見えとおぼつかなし」ともある。

情況の設定は周到というべきで、作者はその上で安心して口吟させることができたであろう。

しかし口吟できればそれでよいのではない。物語の仮構の中で、なぜ口吟させたかが考えられなければならないだろう。

古典大系本の補注は「細流抄」の意見を紹介する。すなわち、子城は北であり、紫の上も北であることによってこれを誦した、という説である。もちろんこれが妙なこじつけだということは、誰の目にも明らかだろう。

また古典全集本の頭注は「源氏の心境と、とりまく風情とが、この白詩の句を口ずさませた」という。まさにそのとおりだが、さてそれではどんな心境であり、どんな風情がとりまいていたのかが、問われなければなるまい。

すでにあげた朝帰りの源氏への、少々残酷な仕打ちは、恨みがましい紫の上の気持として、引きつづき描写される。

よろづいにしへの事を思し出でつつ、とけ難き御気色を恨みきこえたまひて、その日は暮らしたまへれば…… (若菜上)

のごとくだが、さてこの「いにしへの事」というのは、かつて須磨に源氏がいたころのことと理解されているが、そう考えると、逆に先立っても、紫の上は女三の宮の許に源氏を送って一人残された心地につけて、

かの須磨の御別れのをりなどを思し出づれば、「今は、とかけ離れたまひても、ただ同じ世の中に聞きたてまつらましかば、とわが身までのことはうちおき、あたらしく悲しかりしありさまぞかし。…… (同)

と思うとあり、紫の上にとって、今の夜離れはかつての須磨への退

居の、再体験として受取られていることがわかる。「猶残れる雪」は、この須磨別離に挟まれて存在するのである。

上述のように「庾楼眺望」は江州での詩である。この残雪は流滴の人が見たものであり、「曾經多少望郷人」という「望郷」の念を投影したものであった。

そもそも源氏物語の中に江州での白詩が多く用いられていることは、明らかなことであろう。すでに丸山キヨ子氏が、その多用と江州詩の利用による須磨の描写を詳説するところである。⁽¹⁵⁾

したがって、いま女三の宮の出現によって再体験されている紫の上と光源氏との須磨の別離の、一節を構成するものが「庾楼眺望」の江州詩だということになろう。あくまでも顕在化して流れる筋は女三の宮の出現による別離である。しかしその陰の筋として流れるもう一つの別離があり、「いにしへのこと」が「いにしへ」に消え去らない世の条理を示すものが、この詩が暗喩するところだった。

残雪は「子城陰処」にあるという。まさに雪は陰の中に見えるか、残している。しかも残雪である。新しくやって来ているものは春、その中になお過去のものとなりきらないで、雪が残っている。女三の宮という春が、すべて紫の上という雪を消し去るのではない。とくに源氏の心には「猶残れる雪」としての紫の上がいる。

そうなると、紫の上すなわち雪という強引な図式も成り立ってしまう。たしかに、雪は紫の上である。

雪の光見えておぼつかなし。……

雪は所どころ消え残りたるが、いと白き庭の、ふとけじめ見え
わかれぬほどなるに、「猶残れる雪」と忍びやかに口ずさみた
まひつゝ、……

「今朝の雪に心地あやまりて、いと悩ましくはべれば、……

中道をへだつるほどはなけれどと心みだるるけさのあは雪（源
氏の、宮への贈歌）……

友待つ雪のほのかに残れる上に、……

はかなくてうはの空にぞ消えぬべき風にただよふ春のあは雪

（宮の返歌）

このように雪をとり出してみると、最後を除いて、すべてが源氏
の心に投影した紫の上ではないか。最後の歌は宮が自身をとりなし
たから変っただけである。

江州詩は望郷の念にみちている。南の方江州に来て江上を渡る春
風を身にうけながら、白氏はなお見出した雪に故郷を感じ、望郷の
念に堪えがたくいる。

その点からいえば、この望郷の思念にも似た思いを寄せるのは紫
の上に対してであったことになるから、紫の上は単なる雪ではない。
望郷に似た強い思慕をもつ、愛の根源の世界が紫の上との世界にあ
ることを、この残雪は訴えるものであろう。

それに比べると女三の宮の降嫁は、ほんの現象にすぎない。その

とおりに宮は源氏との愛の関係にゆがみを、やがてもたらず。一方
紫の上の死は、やがて光源氏を死に追いやるばかりとなる。

八 官舎閑題―宿木

白楽天は右の「庾楼眺望」を作ったのと同じ元和十一年に「官舎
閑題」という一首を作る。

職散優間地 身慵老大時

送春唯有酒 銷日不過碁

禄米豐牙稻 園疏鴨脚葵

飽餐晨晏起 余暇弄龜兒

（文集、卷十六）

時に白楽天四十五歳、それほどの「老大」とは思えないが、江州
司馬は職として「優間地」にあるという実感が強かったであろう。
そこで酒を飲み碁（碁）に興ずるとは、交遊を尽くすことでもあり、
けつして懶怠というのではない。しかし食に恵まれ時間を与えられ、
龜兒と遊ぶ心のゆとりもある。龜兒は「即小姪名」と注があるよう
に、弟白行簡の子である。

さて、古来この詩が引用されたとされる源氏の個所がある。

「今日の時雨、常よりことにのどかなるを、遊びなどすさまじ
き方にて、いとつれづれなるを、いたづらに日を送る戯れにて、
これなんよかるべき」とて、碁盤召し出でて、御碁の敵に召し
寄す。

（宿木）

今上が薫を召して碁の相手をさせようとするくだりである。今上は今まで、

御碁など打たせたまふ。暮れゆくまゝに、時雨^{しぐれ}をかしきほどにて、花の色も夕映^{ゆづり}えしたるを御覧じて、……

(同)

とあり、この相手は女二の宮である。周知のように今上は薫をこの宮の婿にと考えており、その心から今薫を召すことになる。

そして碁は帝の敗となり、それでは「まづ、今日は、この花^{うと}一枝^{いっし}ゆるす」といわれて薫は階をおりて一枝を折る。しかし、

世のつねの垣根^{かき}にはほふ花ならばこころのままに折りて見ましを

(同)

と薫が奏上するのは、花に女の寓意があるからで、そもそも今上が一枝をゆるすといったのも婉曲な女二の宮の懇懇であった。

しかし薫はむしろ一の宮に憧れているから、これまた婉曲に断つた一首をたてまつった。

この一場の「いたづらに日を送る戯れにて、これなんよかるべき」と碁をもち出すところが、先の白詩の「銷日不過碁」を引いたものとされる。

このことについて源氏の引用が「唯単に偶然や思ひつきのものではなく、予め一定の企図・計画の存する所に重要な特色を見る」とするものが古沢未知男氏⁽¹⁷⁾である。氏のいうところは二点あって「物語の内容を豊かにして居る」、「引用に際して……具体化し散文化し地の

文として融けこませる」ことにあるようである。

そして具体的なことばを拾うと「暗に引用句を利かしつゝ既に立派な地の文として叙述を続けて行く」、「此の一段の構想、根源は『碁』に在り、……文集や朗詠の引用によって企図されたもの」だという。

ただ、どのように立派なのか、なぜ碁によって企図されたといえるかは、明言がない。

ここでいう朗詠とは、これまた諸注が指摘するもので、

聞得園中花養艶 請君許折一枝春

(和漢朗詠集、巻下、七八四)

という無名氏(一説に紀齊名)の詩で、古沢氏はこれと白詩をこもごもに使ったとするのである。

ただ私は、こうして定説化した引用を前に、いささかの躊躇を禁じえない。白詩は春であり源氏は秋である。白楽天に比すべきは主上である。片や江州の謫地であり片や宮中においてである。

朗詠集にしても、「折一枝春」というのであり、秋の源氏にそれを応用すべくもない。源氏は「花一枝をゆるす」という。

白状するとこの問題に、私は長いこと頭を悩ましてきた。その結論は次のごとくだ。

まず白詩は、やはり踏襲されていると思う。秋といっても「常よりことにのどか」で碁を楽しむ雰囲気は距りが無い。江州と宮廷の

区別も「官舎」において乗り越えようとしたろうか。そして今上は最初女二の宮を相手としており、二の宮は時に十四歳である。この俤は「小姪亀児」に通うものがあるではないか。また後には薫を相手とするのだが、薫は今上にとつて、女三の宮を介した「姪」（今いう甥）である。二十四歳、もう「小姪」とはいえないが、女二の宮と「姪」（甥）の薫との間に、イメージ上の重なりが感じられる。そしてさらに、この時今上は白樂天と同じ四十五歳である。今上は三歳で立太子し、二十歳で即位、長い長い生涯を歩いてここまで来た。四十もすぎ「老大」の感も自ら深いであろう。この同年に、私はきわめて作爲的なものを感じる。

しかし、これだけではいささか不安が残る。にもかかわらず私が引用だと思うのは、実は例の朗詠集を引くと考えるのは間違いで、別の白詩を引くのではないかと考えるからである。すでに朗詠集の無名氏の詩について類例として示されることもある白詩だが、⁽¹⁸⁾

晚桃花

一樹紅桃垂抔地 竹遮松蔭晚開時

非因斜日無由見 不是間人豈得知

寒地生材遺校易 貧家養女嫁常遲

春深欲落誰憐惜 白侍郎來折一枝

（文集、卷二十八）

がそれである。太和三年（八二九）、白氏五十八歳の時の作。主旨は人知れず咲く花を折るところにあり、もちろん女を寓意する。こ

の人知れぬところに「貧家養女」を強く意識すれば事柄は逸れていくが、同じ白詩の一枝を折るといふ詩句を「官舎閑題」と併用して源氏の一節が作られたと考えると、この段の構成の基礎が固く思われる。その上でなら、先の朗詠詩がさらにあっても、問題はない。「宿木」のこのあたりは「総角」とも「紅梅」とも時期が重なっている。これまた周到な配慮の中のこと。「紅梅」は句宮の世界であり、「総角」と「宿木」はともに薫の世界だが、「総角」が宇治を舞台とする点が「宿木」とちがう。

この宇治で薫は熱心に大君また中の君を求めており、この世界こそ「晚桃花」の女の世界である。これと明暗を分けて皇女たちの「宿木」の世界があり、その中で、この折花のことが話題となっているのである。

これら全体を、白詩の花を折る詩のモチーフがおおっていたのではあるまいか。

薫は一方で后腹の一の宮に憧れている。だから一概にこの紅桃花がよいというのではないが、しからばなおのこと、寒地・貧家の「花」や「世のつねの垣根には」わなない花を問題にすることが、意味をもって来よう。

したがってこのくんだり白詩が二詩ともどもに用いられ、閑日の情と花への「憐惜」の情とを「総角」「紅梅」の巻までとりこみながら語ろうとしたものだと考えられる。

実は、当の「紅梅」の巻も、花を折ることをライトモチーフとする巻である。

按察大納言は庭前の紅梅の一枝を折って匂宮に届ける。

この東のつまに、軒近き紅梅のいとおもしろく匂ひたるを見たまひて、
(紅梅)

大納言は匂宮の許へ

一枝折りてまゐれ。

(同)

と若君に命ずるので、若君は、

花折らせて、急ぎ参らせたまふ。

(同)

大納言は、

心ありて風にははす園の梅にまづうぐひすのとはずやあるべき

(同)

の一首も添える。

若君が匂宮に「この花を奉れば」(同)、宮は梅がことに好きな宮

であったから「かひありてもてはやしたまふ」(同)。若君は宮を

「花も恥づかしく思」うが、宮は、

この花の主は、など春宮にはうつろひたまはざりし、(同)

と、宮の御方が東宮の許へいかなかつたことを尋ねる。そして、大

納言への返歌をする。

花の香にさそはれぬべき身なりせば風のとよりを過ぐさまじや

は

(同)

大納言と匂宮はさらに歌を贈答する。

本つ香のにはへる君が袖ふれば花もえならぬ名をや散らさむ

大納言(同)

花の香をにははす宿にとめゆかばいろにめづとや人のとがめん

匂宮(同)

そして大納言は妻の真木柱に、匂宮が梅を愛する人だから、

あなたのおつまの紅梅いと盛りに見えしを、ただならで、折りて

奉れたりしなり。

(同)

などと語り、筋は首尾照応する。

この段階で「紅梅」の巻は終りに近く、梅を折って送ることが全編にわたって語られ、華麗な花絵巻となっている。

このことをもって、上に述べた「宿木」やその引喩によって喚起される「総角」と好対照をなすのである。

ところが、ここにも白詩が『河海抄』以下、従来連想されて来た

たしかに最初にあげた「東のつまに、軒近き紅梅のいとおもしろく

匂ひたるを」を読むと、「晚日東園一樹花」の句を思い出すことも

あろう。とくに「晚日東園一樹花」の本文をとると、なおのこと

ある。

北亭招客

疎散郡丞同野客 幽問官舎抵山家

春風北戸千莖竹 晚日東園一樹花

小盞吹酌嘗冷酒 深炉敲火炙新茶

能来尽日觀碁否 太守知慵放晚衙

(文集、卷十六)

この詩は一読して「官舎」「碁」と、前詩との共通が知られるだろうし、もちろん同じ江州にあって同じ年に作られたもの、文集にも二首を距てて載せられ、連作としても読めるほどである。その中の第四句が「紅梅」に配置されたかもしれないのである。

なるほど第四句だけを見ると、源氏と何程のかかわりがあるかと思われるだろう。近代の注が多く引用に与しないこともわかる。

しかしこの詩は「招客」の詩であり、「紅梅」はたった一つ、句宮のおとずれを促す点を主としていた。右に長々と引用したとおりである。

いうまでもなく大納言と句宮との贈答に示されるようにここでも折花が求婚を意味しており、このモチーフを両巻に共通させ、両巻に白詩を引用して有機的ならしめ、かつ「寒地」「貧家」といえる宇治の世界を「宿木」の宮廷世界の裏側に推測させるのが、この並びの巻々の意図であったと思われる。

見事である。

九 香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁―須磨

白楽天は江州にあった元和十二年(八一七)、四十六歳の時に香炉峰の下に新居を営んだ。三月二十七日の完成である。

香炉峰は山頂に雲が湧いて香炉のごとくであることから名づけられたという。景勝の地の新居だが五架三間、そう大きいものではない。

白楽天はこの新居を詩にうたい、重ねて歌う「重題」の詩四首を作った。その最初の、東壁に記した一編は次のごとくである。

五架三間新草堂 石階桂柱竹編墻

南簷納日冬天暖 北戸迎風夏月涼

灑砌飛泉纔有点 扠窓斜竹不成行

来春更葺東廂屋 紙閣芦簾著孟光

(文集、卷十六)

この詩を目にした源氏の作者が、須磨の謫居の描写に利用しないはずがない。はたせるかな、

住まひたまへるさま、言はむ方なく唐めいたり。所のさま絵にかきたらむやうなるに、竹編める垣しわたして、石の階、松の柱、おろそかなるものから、めづらかにをかし。(須磨)

まず「唐めいたり」といい、「竹編める垣」「竹編墻」、「松の柱」「桂柱」とするあたりに、はっきりと意図的な引用が見てとれよう。

季節も源氏には先立って二月二十日の日付があり、後に三月上旬とあって、二月下旬のころを伺わせるが、これも三月二十七日の竣工とそれほどちがわない。

須磨の住居については、すでに、

茅屋ども、葦ふける廊めく屋など、をかしようしつらひなしたり。

とあるが、この漠然とした表現を傍らにおくと、一層白詩に依存した表現をするぞという意図が、はっきりと見える。

何しろ光源氏は須磨にいくに当って、

ことさらよそひもなくことそぎて、さるべき書ども、文集など
入りたる箱、さては琴一つぞ持たせたまふ。 (同)

というくらいだから、態度は明らかである。この部分自身も、

漆琴一張、儒道仏書各三両巻、樂天既來為主

草堂記 (文集、卷四十三)

によっている。ここでいう草堂が今あげた香炉峰下の住居である。

新居は「香炉峰下……」によると来春に東の廂屋を葺こうという。

これによれば今は三室で妻屋がないことになる。その狭小さも読者に感じさせようとするものか。

しかし、上に明らさまだといったとおりに漢籍の引用を目立たせるのは、もっと大きな意図をもっていたらしい。実は「香炉峰下……」引用の箇所は頭中将が須磨を訪ねてきた場面であり、久闊を叙し、二人は、

夜もすがらまどろまず、文作りあかしたまふ。 (須磨)
つまり一晚中漢詩を作り合ったというのである。

親友同士詩を作り合うといえは、すぐに白楽天と元稹のことが思ひ出されるであらう。すでに、須磨の住居は白楽天の江州謫居と似

(同)

ており、そこには白楽天自身の本が多いといった。この時点で光源氏は楽天と紛らわしいのだが、そこにもう一人頭中将が加わってくれば、彼もまた元稹と紛らわしい。すなわち、源氏の作者は頭中将と光源氏とを、元白に比そうとするのである。

このことはすでに古沢未知男氏が「恰も楽天と元稹の再会を思はせるものさへある」といっている。⁽²⁰⁾

その証拠に、源氏は二人の別れぎわに、元稹と別れる時の白詩の一節を「酔ひの悲しび涙灑く春の盃の裏」と口吟したという。これは「十年三月三十日別微之於澧上十四年三月十一日夜遇微之於峡中停舟夷陵三宿而別言不尽者以詩終之因賦七言十七韻以贈且欲記所遇之地与相見之時為他年会話張本也」(文集、卷十七)という長い題名の詩の一節「醉悲灑淚春盃裏」である。

ここには二度にまでわたる二人の別れが歌われ、いやでも別れが強調されるであらう。さらに、この後にも、

黒駒奉りたまふ。「ゆゆしう思されぬべけれど、風に当りては、
嘶えぬべければなむ」と申したまふ。 (同)

と別れを漢語(驪馬)『漢書』王式伝)や『文選』の古詩によって語りつづける。

驪馬を別れに用いるのは大伴旅人(万葉集、巻五)に前例があり、かつ旅人の親友、山上憶良は、自らを李陵に旅人と蘇武になぞらえて、別れの悲しみを述べる。⁽²¹⁾ 源氏はこれを踏襲した。

元稹は江州に白楽天を訪れることこそなかったが、古沢氏も指摘するように「八月十五日夜禁中独直对月憶元九」（文集、卷十四）が「須磨」に引かれており、光源氏の心中に、「元稹」は近々と存在した。

元稹は「香炉峰下……」の作詩と同じ年、緑糸の布と白い軽袴を送ってくれた。白の病妻はあえて親しく裁って衣服を作る。白はそれを詩にして友に送った（文集、卷十七）元九以緑糸布白軽袴見寄製成衣服以詩報知。

こうした友情をもって、源氏の作者は、よく光源氏と頭中将との邂逅に元白を擬することができたであろう。

こうした元・白＝頭・光の文脈の中に「香炉峰下……」もあってみれば、この草堂は頭中将の友情を待ちあぐねる建物であり、友への思慕にみちた謫地の小屋だということになる。思慕は流謫の情によって一層つのるであろうし、流謫の悲しみはより強く思慕を深めるであろう。この思慕と謫情を暗喩するものが、白詩であった。

十 重題四首、その第三首―「須磨」

ここで「重題」というのは右の「香炉峰下……」の詩について四首が重ねて題されたものことで、文集では「……題東壁五首」と一括されることもある。

その重題の第四首が著名な次の詩である。

日高睡足猶慵起 小閣重衾不怕寒
遺愛寺鐘敲枕聽 香炉峰雪撥簾看
匡廬便是逃名地 司馬仍為送老官

心泰身寧是帰処

故郷何独在長安

（文集、卷十六）

この詩を有名にしたのは第三、四句を『和漢朗詠集』（山家）が採用したことによるが、引用は源氏にも見られる。須磨が秋を迎えたころである。

御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、独り目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、……（須磨）

この「枕をそばだてて」聞くという表現は、特殊なだけに白詩由来のものと考えるべきであろう。とくにこのあとにも「枕浮くばかりになりけり」とあり、枕を中心として叙述が進められるのは、白詩の力によるにちがいない。

白詩は初句に一種の倦怠を叙し「猶慵起」といえば、頭はまだ枕にあるとすべきだろう。次の「重衾」もまだ寝ている趣だから、そこで「枕をそばだてて」ということになり、一方の「撥簾」もまだ床にあって簾を垂れていたことを意味している。その中に閑居の情もあるという気持である。

だから一種の隠逸を楽しむ風情になっているが、源氏の方は悲傷の情が深く涙がとめどもない。白詩を知っている者は、この変化にとまどいすらあるだろう。

しかし、読者はこの一節から白詩を忘れていたわけにはいかない。とすると、このように仕組んだ作者の意図は何だったのか。

白の隠逸をすら否定した流竄の思いを言いたかったにちがいない。白詩は長安だけが故郷ではないという結論で自分を納得させようとしているが、これを真向から否定し、光源氏には故郷は都にしかないのだという主張がよみとれる。

「須磨」はまるでつづれの錦のように漢詩をちりばめながら叙述を進めるが、とくに白詩の引用を飛び石のようにして、語られる光源氏の心情は、哀愁をきわめたものである。上述のように「二千里外古人心」を口吟し、草堂が語られ、そして元白の悲別詩が口になる。

この飛び石の一つとして、鐘の声は嵐にかえられ、よって一途な望郷を強調することになった。

十一 重題四首、その第三首―朝顔

「朝顔」の巻に、光源氏が紫の上にしみじみと回顧談をする雪の一夜がある。源氏全体においても一、二を争う名場面だといえるが、月光に照らされる雪を見ながら、光源氏は、

「時時につけても、人の心をうつすめる花紅葉の盛りよりも、冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやしう色なきものの、身にしてみて、この世の外のことまで思ひ流され、おも

しろさもあはれさも残らぬをりなれ。すさまじき例に言ひおき
けむ人の心浅さよ」とて、御簾巻き上げさせたまふ。

（朝顔）

とある。月が雪を照らすのではない。月に雪の光が映えるというあたり、見事としかいいようのない把握であろう。そうした周到な月と雪の理解は、はたせるかな「この世の外のことまで思ひ流され」という。月と雪の映発しあう情景は、人の心を死の世界へと運ぶのである。

月光が人を死にいざなうことは、周知知られたことであり、また上にふれたごとくである。雪月花という花もまたこの傾向が著しく、雪も例外ではない。人は、これらの美がもつ力に抗しがたいのである。

そこで、この死の世界への連想とは、今の場合具体的である。先立つこの年の晩春、藤壺が身まかった。その年の冬であり、以後につづく会話に、藤壺の回想があり、「昔今の御物語に夜更けゆく」と、

月いよいよ澄みて、静かにおもしろし。

（同）

そして雪の戸外を眺める紫の上に「恋ひきこゆる人」藤壺の面影がしのばれたという。すなわち、「この世の外のこと」とは、死の世界にいる藤壺のことであった。

ところで、右の「御簾巻き上げさせたまふ」に「重題」第三首の

上掲句、

香炉峰雪撥簾看

を連想するのは、ごく自然であろう。「河海抄」以後、多くの研究がこの指摘を踏襲してきた。⁽²²⁾これほど著名な句であり、雪を簾を上げてみるといえば、関係はもう無視しがたいであろう。

この引用をごく自然に考えれば、白詩はいつもながらの江州詩である。流謫にまがう気持を光源氏がもっていたのだという主張を匂わせるものと見ることになる。かりに朝顔への気持が光源氏の中にあったにせよ、やはり藤壺の死という打撃の中で、無惨な思いにひしがれた境遇は、辺陲の精神風土だといってよい。

ついでながら『枕草子』の有名な定子と清少納言の会話にしても、これが江州詩だという枠は外れていないと私は思ってきた。定子の問はすでにそこにきざしており、清少納言が答えたことは、負の意識がよく流通しえたということであった。

いまの場合も例外ではない。

しかし上述のように、第三首のこの詩には、むしろ逆に現状を享受しようとする意志がある。それを無視して、とかく感傷的に理解するのは誤りであろう。漢詩人として流謫に堪え、さらに翌年また忠州に移される境遇にあるしたたかさも、認めなければならぬ。

この詩は、十分に負の世界にいながら、しかし文人としての誇りを持って閑居を楽しもうとする一首である。

この気持ち、源氏の作者がこの段落にこめたと見ることは可能であろう。現実には紫の上がおり、不完全な関係ながらも朝顔がいて、いわば一つの「草堂」の世界がある。妻もあり、今年二歳になる阿羅もいるのが草堂であった。

しかし、強がりをもってみても白楽天はやはり長安を慕っている。このあり方は、やはり藤壺を忘れたい気持と一致するであろう。

その揺れ動く心は、光源氏のことばに、見事に現われているではないか。目前の景色が「すさまじき例に言」われるのが普通だという。「あやしう色なきもの」が月と雪の景だという。

しかし、この一見や通常を破って、今やこれこそが「おもしろさもあはれさも残らぬをり」であるという。そのおもしろさもあわれさも、常識的に人気がある花、紅葉の盛り以上である。

この価値の対置の仕方は、まさに当の白詩のものではないか。

負の中に住み定めて、そこから正の価値を汲み上げてくるためには、御簾を上げなければならなかったのである。

十二 重題四首、その第三首―総角

実は、右ときわめて似た部分が源氏に登場する。「総角」の一節、主人公は薫である。

雪のかきくらし降る日、ひねもすにながめ暮らして、世の人のすさまじき事に言ふなる十二月しほすの月夜の、曇りなくさし出でた

るを、簾捲き上げて見たまへば、向ひの寺の鐘の聲、枕をそばだてて、今日も暮れぬ、とかすかなるを聞きて、……

(総角)

十二月の月を「世の人のすさまじき事に言ふ」といい、しかしその月が雪の上に皎々と輝くと簾を捲き上げて見、折しもの鐘の聲を枕をそばだてて聞いたという。白詩は、二句を引くことをもって、右以上に確實で、構想はまったく美しい。

しかも、つい先月、薫は懸恋の大君を失っており、そのことまで同じである。こうなるとこの場面の設定は意図的に「朝顔」を真似たものだと考えるべきであろう。事実、右の叙述のあとで薫は、

おくれじと空ゆく月をしたふかなつひにすむべきこの世ならね

ば

(同)

の一首をよみ、大君の死の世界に心ひかれる様子を告げる。

それでいて薫には中の君が残されており、この情況も同じで、先の節に述べた心の動きは、ここでもひとしいことを、源氏の作者は訴えたかっと思われる。

ただ多少の違いも用意された。「朝顔」が簾を上げるだけであつたのに対して、ここでは枕を敬ることが引用される。しかも「向ひの寺」といい、近々と寺の鐘が鳴るのであり、薫のつづく歌は「空をゆく月をしたう」といい、西方浄土への憧れを強く出していい。「今日も暮れぬ」が、

山寺の入相の鐘の声ごと今日も暮れぬと聞くぞ悲しき

よみ人知らず(拾遺集)

を引歌とする先説に従うなら、仏教的無常は一層濃い。

さらに『大般涅槃經』その他に見えるという雪山童子の故事も引かれ、薫の心が大きく仏教的な境地に傾いていることが知られる。つまり白詩のもう一句の追加はやみくもになされたのではなく、薫の仏心を導くために準備されたものであつた。

先節に述べた、負を正とする主張は、情景を肯定するものであつたが、ここではさらに仏心の安らぎを加えて、正の主張をより強くしているといえよう。

白楽天は詩集を香山寺におさめる程に仏心を深めた詩人である。しかもそれは後半生に強くなる。京にあって諷諭詩などを作っていた時は、霸氣にみちた社会派の倂を強くもつが、こうして流滴を重ね年輪を加えて仏心は増大していった。この間のことは堤留吉氏に従えば「四十四歳頃まではだいたい儒家思想に支配されることが多かった」が、「四十四五歳以後は主として道家・仏家的思想に支配され、晩年にはとくに仏家的思想に支配され」た⁽²³⁾という。「重題」詩は四十六歳三月の作である。源氏の作者はもちろん全白氏像を知っている。その上で、いち早く香炉峰の草堂にそれを嗅ぎとっていたかもしれない。

道家的にいえば詩中には「匡廬」とあり、匡裕という仙人がかつ

てここに住んだことを強く意識している。そのことをもって自分もここに安住しようという気持が働いているであらう。

堤氏のいう道家と仏家との併存する世界を私も認めることができるとし、反対に「帰処」がここだといひ、「故郷」は長安だけではないというのは、律義な儒教精神を放棄しようとしているかのごとくである。

一連の「香炉峰下……」という詩の中には「孟光」なる語が見える。東漢の梁鴻の妻で賢妻の誉高い女性だが、梁鴻は貧しかった。

ここで孟光をあげるのは、むしろ白楽天自身の貧をいいたいからであらう。

清貧に甘んじ、「名を逃れ」て「老を送る」、まさに隠逸の境地をこの詩にうかがうことができよう。それに合わせて、仏教的な境地も併存することになる。それが遺愛寺の鐘を、あえて枕を敬ててきく態度である。

実は、枕をそばだてて聞いたこの鐘が遺愛寺の鐘であったことも、看過できないのではないか。

遺愛というその名の中に、大君が死に、後に遣されたのが薫であり、中の君であった。薫がいま「おくれじ」というように、薫は死におくれたのであり、死者に先立たれて、愛ばかりがいたずらに残っている。

遺愛ということばは、中の君を薫に託して死んだ大君にとっては、

中の君をいうことばでもあらう。

もしこの推測が当たっているとすると、藤壺を死者としても、今ほどの「遺愛」の情はなかったから、そのあたりの計測も、源氏の作者は正しかったことになる。光源氏にとっては藤壺の死は愛の遺恨であったが、中の君に当たるような存在は、紫の上ではない。「朝顔」に加えたものとして、仏心とともに、この鐘の音も大事なものであった。

とにかく他の作品——『大鏡』にしる『曾我物語』にしる「重題」第三首の引用は必ず流謫に關しているのに対して、源氏物語は光源氏も薫も都世界にいる。

源氏の作者にとって大事なのは具体的な土地ではなくて、もっぱら精神における風土であった。その本質的な適用と、結果としてもたらされる比喩の世界の深さに、われわれはまたしても驚かざるをえない。

注

- (1) 古沢未知男『漢詩文引用より見た源氏物語の研究』九ページ。
- (2) 丸山キヨ子『源氏物語と白氏文集』一〇六ページ。ただし「類似」とし、「引用」とはしない。
- (3) 阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『源氏物語』第五卷二二七ページ。

(4) 堤留吉『白楽天研究』一四七ページ。

- (5) この引用を認めるものに注1の著書がある。一〇ページ
- (6) 注1の前掲書一〇ページ。注2の前掲書一〇七ページ。これも「類似」。
- (7) 注1の前掲書一〇ページ。注2の前掲書一〇七ページ。ただし「類似」とする。
- (8) 注7に同じ。
- (9) 「引喩と暗喩(三)―源氏物語における白氏文集『李夫人』など」『日本研究』第三集。
- (10) 第五卷三九一ページ。
- (11) 「月を忌むこと」全国大学国語国文学会春季大会報告、一九八九年六月十一日。
- (12) 最近の研究では注2の前掲書(一〇七ページ)が「類似」としてあげる。
- (13) 日本古典文学大系『源氏物語』第三卷、三二〇ページ。
- (14) 日本古典全集『源氏物語』第四卷、六三ページ。
- (15) 注2の前掲書一七一―一九一ページ。
- (16) 注1、2、3の諸書。
- (17) 注1の前掲書一四二―一四四ページ。
- (18) たとえば川口久雄氏校注『和漢朗詠集』(日本古典文学大系)二五二ページなど。
- (19) 注2の前掲書一〇七ページ。『河海抄』の引く本文は「暁日東簷一樹花」。
- (20) 注1の前掲書一三一ページ。
- (21) 拙稿「良陵の間」『日本文学の特質』所収。
- (22) ただし注1の前掲書はあげない。

(23) 堤留吉『白楽天研究』五六ページ。

なお、文中に引用した本文は、次のものによる(ただし、白氏文集は他本を参照した箇所がある)。

- (一) 『源氏物語』阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注・訳『源氏物語』(日本古典文学大系) 小学館 一九七〇年―一九七六年。
- (二) 『白氏文集』『白氏長慶集 上下』(長沢規矩也編『和刻本漢詩集成』) 汲古書院 一九七四年。